

クライストの「ハイルブロン乙女ケートヒェン」 における『クニグンデ』をめぐって

Kunigunde in Kleists Kätchen von Heilbronn

松 永 知 子

Tomoko Matsunaga

(1)

クライストのこの作品は彼のドレスデン時代（1807～1809年）に作られたものであり、1807年晩秋にはすでに着手されていたことがマリー・フォン・クライスト宛の彼の手紙から推測される。

「今、私はあなたがハイルブルンのケートヒェンに何と言われるか、知りたくてたまりません。というのは、ケートヒェンはペンテジレアの裏面であり、彼女の対極であって、ペンテジレアが行動によってそうであるごとく、ケートヒェンは絶対的の献身によって、まったく同じように力強い存在だからです。」

翌年の1808年には作品の一部が雑誌「フェーブス」に発表された。第1幕と第2幕第1場までが4・5月の合併号に、第2場から2幕の終りまでが9・10月号に発表されている。9・10月号が出る前の10月2日にウィーンの劇場関係者のコリーン宛に、クライストは舞台向けに手を加えたケートヒェンの脚本を同封することを書いており、さらに舞台がそれをとりあげることを懇願すると同時に、その作品を印刷してくれることになっている。コッタ書店のもとで印刷が先行してしまわな

いように、その事情をどうか早く知らせて欲しいとまで書き添えられている。この手紙から「ケートヒェン」の舞台用脚本は、この時までに完成されていることがわかる。1808年の年内にはこの脚本の写本が数通作られ、ドレスデンとベルリンにも送られたが、ウィーンに送られた脚本を含めてこれらの写本はすべて散逸し、残っていない。

結局、ウィーンでの初演は1年半後の1810年3月17日のことであり、単行本出版はさらに遅れ、コッタ書店との交渉が2年以上続いたのち破談となり、ライマー書店のもとで1810年9月末に出版された。これが初版であるが、初版の原稿は残っていない。現在残っているのは、「フェーブス」に掲載された断篇と初版の単行本だけということになる。

ところでウィーンに送られた脚本自体は失われているが初演のときに雑誌「デア・ザムラー」にヴァイトマンが匿名で書いたこのドラマの梗概と登場人物の配役を載せてある初演のプログラムとが残っており、これらからこの脚本を幾分なりとも推測させる手がかりを与えてくれているが、これを初版と比較してみるとかなり相違していることがわかる。

初版が刊行された翌年1811年の夏に、クラ

イストはマリー・フォン・クライスト宛にこの作品の出来ばえを嘆く手紙を書いている。「私は人々の批評にこれまで余りにも支配されすぎていました。特にハイルブロンンのケートヒェンはその跡で一ぱいです。それは最初から実にすばらしい構想が働いていたのでした。ところが、それを舞台に合わせようと意図したあまりに私は失敗をおかしてしまったのです。その失敗を思うと今私は泣きたいほどです。」

この手紙の中でクライストは「ケートヒェン」は舞台を考慮して書き改められたことを匂わせている。これらのことを考え合わせると、この作品には現在われわれが見ているものとは根本的にちがう初稿が存在したとされる仮説がかなりの信憑性を持ってくるだろう。

特に、クニグンデにおいては変化が著しいので、本論ではクニグンデを中心にどのように書き改められたのかを探っていきたい。まず、「フェーブス」に掲載された第1幕と第2幕とを初版と比較することから始めるが、第1幕にはクニグンデはまだ登場しないし、第1幕は両版とも初稿の形がほゞそのまま保たれているとみなされるので問題はなく、第2幕の後半が、直接に比較の対象とされよう。

(2)

第1幕第1場 舞台は地下の洞窟で、秘密裁判所。裁判長をはじめとして大勢の陪審官はいずれも覆面をしている。原告としてハイルブロンンの鍛冶屋テオバルトが、被告としてはヴェッター・フォン・シュトラール伯爵が法廷に立つ。テオバルトはシュトラール伯が彼の娘のケートヒェンの心を魔法でたぶらかしたと告訴する。裁判長はシュトラール伯が娘の心をこっそり盗みとったからといって魔法使い呼ばわりするのは、少し度が過ぎていないか、とただす。だが、テオバルトはひるまず、その事情を長々と話す。娘ケートヒェンは、どんなに愛らしく、気だてのよい

娘であるか、そして町で評判の娘であるかを、この自慢の娘が誘惑されたのである。どんな風にかというと、聖霊降臨祭の前日のこと、見事な甲冑に身を固めたシュトラール伯が、肩と胸の間の鉄帯がはずれたのでそれをしっかりと留めてもらいたい、とテオバルトの仕事場に現われた。仕事にとりかかっている際に、ケートヒェンが戸口に姿を現わしたが、騎士の姿を一目見るなり、何もかも投げすて、死人のように青ざめて伯の足もとにひれ伏して気絶したのである。やがて、鍛冶の仕事も終り、伯が再び馬にまたがった瞬間ケートヒェンは30フィートの高さの窓から通りへ飛びおりた。彼女は骨折し、6週間瀕死の床に寝たきりであった。ところが容態がよくなるとある朝、シュトラール伯爵のところへ行くと女中に言い残して、姿を消してしまった。それ以来、彼女は何もかもほうり出して、娼婦のようにシュトラール伯の姿を追いかけている。石ころ道を裸足で歩き、雨も風も荒地も森林もものともせず、犬のようにあとをついてまわる。

テオバルトの陳述に、シュトラール伯もこの事実を認める。彼の往くところ影法師のようにあとをつけていることに気づいたので、ハイルブロンンの父親のところへ使いをやり、ケートヒェンは自分のところに保護してあるから、すぐ迎えに来てもらいたいと伝えさせた。ところが、父親が娘を迎えにやってくると、娘は父の手に渡さないでと叫んで、シュトラール伯の足もとにひれ伏したのである。

このような事情であるが、裁判官たちにはシュトラール伯の有罪を確定することができない。そこで、次にケートヒェン自身を喚問することになる。

第1幕第2場 ケートヒェンは目隠しをされ、二人の廷丁に導かれて登場する。裁判官たちはケートヒェンを審問しようとするが、ケートヒェンはシュトラール伯以外の誰をも相手にしないので、審理は伯に一任され

る。両人の問答がはじまり、伯の無罪が徐々に明らかになっていく。最後に、投票による採決で全員の一致で伯の無罪が決定される。シュトラール伯はケートヒェンに、今後、絶対にあとを追わないことを誓わせる。ケートヒェンは約束をして倒れ伏す。

第2幕第1場 舞台は秘密裁判所の洞窟の前の森。シュトラール伯の長い独白がはじまる。彼はケートヒェンを愛してはいるが貴族の身で平民の娘を妻にできない、と心の中の葛藤を切々と吐露する。しかし、いつの日かケートヒェンに似た娘を妻にできたら、しあわせだろうと結ぶ。

第2幕第2場～第7場 場面はいよいよクニグンデの登場へと進むが、ケートヒェンとの出会いとは正反対の出会いが用意されている。シュトラール伯の母君からの使者が登場し、ライン伯の挑戦状が届いたことを報告する。ライン伯はクニグンデ嬢の名において、シュトラール伯の先祖のオットーが彼女の先祖ペーターから譲り受けたシュタウフェンの領地、すなわち3つの町と17の村およびその飛び地の買い戻しを要求する。同じ要求がすでにフライブルク伯によって、またその前にも彼女の従兄たちによって繰り返されていたもので、今度で3度目の挑戦である。それもこれもクニグンデの妖しい美貌によってそそのかされたもので、お払い箱にされた先の婚約者フライブルク伯が復讐心で煮えくりかえっていることは、想像にかたくない。

第4場からは場面が変わって、山中の炭焼き小屋。フライブルク伯はクニグンデを奪って逃走中に雷雨にあい、炭焼き小屋に雨やどりをする。さるぐつわをして縛りあげてあるクニグンデをマントで隠して、急病の妻と偽って小屋に運び入れる。そこへシュトラール伯の一行が現れて、やはり小屋の中で雨やどりをしようとするが、先客があると断わられたので、木陰で夜を明かす準備をしていると炭焼きの少年が出てきて、小屋の中には縛られ

てさるぐつわをかまされた若い女がいると告げる。シュトラール伯は助け出すように命じる。少年は父親らの協力を得てクニグンデを小屋から救い出す。

第2幕第8場 クニグンデは髪をふり乱して、シュトラール伯の前にひれ伏して助けを求める。フライブルク伯は、夫婦のことに立ち入るのは僭越ではないか、と言って剣を抜く。シュトラール伯は受けてたち、相手を切り倒す。そこで初めて相手がフライブルク伯であることを知る。瀕死のフライブルク伯に対してクニグンデは、息がつかまって死ぬがよいとののしるが、シュトラール伯に対しては、彼女は堂々と名を明かして、一族をあげて感謝を捧げると言う。シュトラール伯は名を聞いて驚き、あなたは小難をのがれて大難にあわれたと答える。クニグンデも一瞬うろたえるが、すぐに気転をきかせて、感謝の気持ちは変わらない、私の所有するものは今後すべてあなたのものです、私の身の処置もあなたの心のままです、としおらしい態度にでる。

シュトラール伯はとまどって、とりあえず私の母のもとで一夜を過ごされるようにと言う。

ここまでのところを「フェーブス」に掲載された部分と初版とを比較してみると、第7場の炭焼き小屋の場のところで、3ヶ所にわたって大巾に削除され短縮されているが、これは単に筋の圧縮ないしは単純化にすぎないものである。筋の進行には関係のない過剰なものは、もしくは重要でないものを切り捨てることは、クライストの作品の推敲過程においてよくみられることである。このような作業により筋はすっきりとするが、その代りに脇役たちの饒舌なおしゃべりによって生き生きしていた個々の場面のおもしろさが欠けてしまうのは、いたしかたないことでだろう。第8場のシュトラール伯とフライブルク伯の剣げきの場も、激しく短い言葉の応酬で、「フェーブス」版の方が激情を盛り上げているし、

特にフライブルクが倒れるところではより劇的であった。

ところが続く第9場と第10場では「フェーブス」版と初版とで、大きく変っている。初版では第9場は全く異なる場面に代えられているし、第10場は100行がわずかに15行に縮められており、これには作者の最初の意図への何らかの変更が考えられずにはいられない。

「フェーブス」版では第9場は次のようになっている。

倒れたフライブルク伯のまわりを彼の友人や炭焼きの男たちがとり巻いて、彼の生死を危ぶんでいる。彼が少し持ち直すようにみえたところで、友はあの女はどんなやり方でこんなにも君を魅きつけたのか、とたずねる。フライブルクはそれには答えず、クニグンデがシュトラール伯とともに彼の城へ行ったことを聞くと、シュトラールは明日は彼女に恋をし、明後日には婚約するだろう、しかしシュトラールは納骨堂で婚礼をするのだ、とわけのわからない予言をする。その意味を問おうとするが彼はもう口が聞けない。その意味はクニグンデの侍女ロザリーエにたずねよと答えて、再び倒れる。

クニグンデの正体を暗示するこの場面が、初版では全部削除され、その変りに新たに、シュトラール伯の女中頭の老女ブリギッテが語る世にも不思議な話にさし変えられた。ブリギッテは、クニグンデが昔ドイツ帝国の玉座につかた皇帝の曾孫にあたと聞いて、これで伯爵さまの夢が成就すると喜ぶ。ブリギッテの物語るところによると、伯爵はおとこの暮れのこと、奇妙なふさぎの虫にとりつかれてそのあげくに重態に陥った。高熱を出してうわごとばかり言っており、医者たちもさじを投げた。自分は喜んで死んでいく、自分を愛することのできる娘はこの世にいない、愛のない生活など死にひとしい、この世は墓だ、墓が自分の揺りかごだ、だから死んではじめて生れるのだ、と熱にうかされて、胸の

底に秘められていたことが口からついて出た。母君は三日三晩の間つきっきりで看病した。彼は母に語った。天使が現われて「信ぜよ、信ぜよ、信ぜよ」と呼びかけ、大晦日の夜、新しい年がはじまるときに自分を少女のもとへ連れて行ってくれると約束したと。それから大晦日の夜、彼は寢床から半ば身を起こして、幻でも見ているように部屋の一角をじっとみつめていたが、彼女があそこにいる、彼女のところへ行くと行って倒れてしまい、「お母さん、さようなら」と言って息が絶えた。が、やがて再び突然起き上がり、自分を愛してくれる少女のところへ行っていたと言う。その後、伯爵はすっかりもとどおりになり、夢の話を書きのないくらいにした。天使が手をとって闇の中を連れて行ったこと、少女の寢室のドアを静かに開けて、さん然たる光で四方の壁を照らしながら少女の方に近づいて行ったこと、肌着一枚でそこに寝ていた愛らしい少女が、彼を見て目を大きく見開きびっくりしてかすれた声で「マリアーネ」と呼んだこと、それは隣室に寝ている誰かにちがいないこと、それからその少女は喜びで顔をまっ赤にして、ベッドから降りて彼の前にひざまずいて頭をたれて「殿さま」と小言で言ったこと、天使は彼にこれは皇帝の娘だと言い、少女のうなじにある紅色のほくろをさし示したこと、彼が言いようもない歓喜にふるえながら、少女の顔を見ようとあごに手をかけたとたん、さっきのマリアーネという女中が、明りを持ってやってきたので何もかも一度に消えてしまったことを。

クニグンデは、その皇帝の娘が私だと言うのとたずねる。ほかにどなたがおられましようかとブリギッテは答える。

第10場、場所は同じくシュトラール城の一室で、化粧台を前にしてクニグンデと侍女のロザリーエがいる。面者の対話は「フェーブス」版では3つの部分に分けられる。最初は化粧術についての対話である。クニグ

ンデは女性が化粧する意味について長々と講釈する。

「ロザリーエよ、この巻き毛はこゝでは凝りすぎているように思えるけれど、お前はと思う。技術ができることをしつこくするのが私の望みなのではない、むしろ重要でないところでは、お前に思いきって手を抜いてもらいたいと思っているの。それによって全体がより完ぺきに見えるように。」

そして、髪にさしてある羽根飾りを留めてある宝石を髪で隠すように命じる。輝やいている宝石を隠そうとする心こそを人は見るものだと言う。

ロザリーエはクニグンデが心を重んじていることを、彼女らしくないと訝がる。さらにクニグンデは言う。

「お前が私の化粧台で行う技術というのは、形と色を組み合わせることによって、人の感官を刺激するだけのものではない。心という眼に見えないものをあらゆるものに、私が身につけている命なきものにまで、私は現わさせたいと思っているの。例えば、垂れているリボンも、花束も、装飾品も、端折った着物もそれら一切が何かを語り、私の心の状態を現わす特徴になっているのよ。ごらん、お前がこゝにひときわ目立つようにと誇らしげにさしてくれたこの羽は、確かに何かを語っているでしょう。けれど、今日の目的のためには、私はこの羽を折り曲げましょう。こうするとこれは全く別のことを語ってくれると思うの。なぜなら、今日私がお待ちするのはシュトラール伯なのだから。これでやっと私の感じていることが表わされているわ。あの方にもどのように感じたらよいのか教えてあげられる。」

続いて、対話の第2の部分へと移る。話題は前の晩の出来事である。ロザリーエはクニグンデと引き裂かれたあと途方にくれていると、空にうっすらと虹がかかっているのを見つけた。喜び勇んで、虹の門をくぐって歩み

はじめると、朝にはシュトラール城の前に着いた。こういって、彼女はクニグンデと再会できた幸運を喜ぶ。他方、クニグンデにとっての最大の関心事はフライブルクの生死の情報であって、彼が死んだという確証が得られたら、その言葉に対して一粒の真珠で報いてあげると言う。

初版では、ここまでが全部カットされ、次の第3部のみが残った。そのため、ロザリーエは説明抜きでこつ然とシュトラール城のクニグンデのもとにいるという不手際が生じてしまった。ロザリーエはシュタウフェン領地に関する証書類をもって傍にひかえている。他方、クニグンデは窓の外に誰かが立てかけたモチ竿に、獲物がかからないかと見張っている。このクニグンデの姿の中に、彼女のシュトラール伯に対する関係が、比喩的によく表われており、ドラマの提示部としての役目を果している。この部分だけが残されたことで、初版では今後のドラマの展開の方向づけがより明確になったと言えるが、それに引き替えて、クニグンデの性格づけが一面的で薄っぺらになったことは否めないであろう。

「フェーブス」版の第9場のカットと第10場の極端な縮小に対して、T.カイザーは次のような説明をしている。フライブルクやロザリーエの出番をカットしたのは、筋の圧縮のためばかりでなく、脇役にすぎない人物に過大な重量を与えられることを避けるためである。第10場の残り3分の1の部分を中心にすえることで、劇の発端としてはクニグンデのシュトラール伯に対する関係を重要視したのであるが、その代りに、前半3分の2の部分、すなわちクニグンデの奥深い化粧術についての哲学の開陳とフライブルク伯に対する狂暴なまでの憎悪、これらがカットされたことにより、個人としてのクニグンデの性格づけは失われてしまったと。

第9場がブリギッテの話に入れ代えられたことで、「フェーブス」版と初版とではシュ

トラール伯とクニグンデとの関係も当然変化している。初版でのシュトラール伯は、皇帝の娘と天使が告げた大晦日の晩の夢とクニグンデとが符合することで、彼女との間に最初から内的な結びつきを見ているので、クニグンデとしては彼を魅きつけるのに、今や化粧術にのみ頼ることはなく、彼の思い込みを利用しさえすればよいことになった。それ故に、初版では化粧術の哲学の開陳の部分は不用になったと言えよう。

ところで、F.レベリングはクニグンデという人物は、クライストの思想の文学的な表現とみなしている。^(注2)すなわち、人間の感覚的認識は欺かれやすく錯覚しやすい、人間は感覚によっては事物の本質を認識できない、という思想。

シュトラール伯は感覚の欺まん性と理性の省察にとらわれているがため、判断を狂わせられるが、クニグンデは人間の感覚の誤りやすさを逆手にとって、意識的に欺こうとする。こうしたクニグンデの意識的な態度は、化粧術の哲学の開陳の部分によく表われていた。クニグンデはシュトラール伯の気質をすぐに見抜いて、彼は外見の美しさだけでは魅きつけられないと見て、もう一步踏みこんで内面的美しさを技術によって現わさせようと努力している。このようかなり奥深く表現されているクニグンデの人物像は、この延長上に発展させたならば、シュトラール伯は彼女にいいように翻弄されたであろうが、この部分が削除されたことにより初版のクニグンデには、それほど人間味が感じられなくなっている。そのうえ、第4幕でわかることだが、輝やくほどの彼女の美しさの実体は、実はその素顔は二目とは見られないほど醜怪とされて、漫画的になってしまったように思われる。

第2幕の最後の第11場と第12場は両版で大きな相違はない。

クニグンデはシュタウフェンの領地の権力の根拠となっている書類をシュトラール伯に

捧げて、自分は一切の権利を放棄すると言って、伯と伯の母君を感激させる。シュトラールはすぐに結婚を決意する。「フェーブス」版では、性急な息子の決心に母はしばらく考慮してからでも遅くはないとなだめる風であるが、初版では、彼女は古いザクセン王家の血を引いている、という言葉が入ってきて彼の決意は固い。

(3)

ウィーンに送られた脚本は初版以前の草稿であるが、これ自体は残っていない。しかし前にも書いたように、初演の際にヴァイトマンが紹介したこのドラマの梗概が残っているので、次にこれを見ておきたい。^(注3)

クニグンデは色情狂の手のつけようがない毒婦とある。見せかけの雅量によりシュトラール伯の心をかち得、彼に結婚を決心させる。だが、他方では彼女は彼の滅亡をたくらみ、同盟者たちに夜の間に彼の城を攻略するよう命じ、侍女には彼の一族もろともに毒をもって消すように命じる。しかしこの命令をしたためた手紙が取り違えられて、偶然にもケートヒェンが滞在していたところの主人の手に渡る。彼はケートヒェンにこの手紙を渡してシュトラール伯のもとへ送る。

かくして陰謀は阻止されるが、城は火をつけられる。このとき、ケートヒェンは身を投げ打ってクニグンデのために絵と貴重品の入っている小箱を運び出す。館がケートヒェンの上で崩れかかろうとしたときに、天使が現われ彼女を救い、彼女を無傷で焰の中から外へ連れ出す。天使は伯爵に告げる。彼は君主の娘と結婚するであろうと。伯爵は庭で眠るケートヒェンから自分がどんなに愛されているかを聞く。最後にシュヴァーベン国王が現われて、ケートヒェンは自分の娘だと宣言する。伯爵とクニグンデとの結婚式がまさにとり行われようとして、クニグンデが花嫁衣装をつけてきらびやかに着飾って現われたと

きに、フライブルク伯がすすみ出て彼女はこの結婚にふさわしくないと宣言し、国王の娘としての衣装をつけたケートヒェンを婚礼の祭壇へと伴う。クニグンデは入牢の宣告をうける。

これを初版と比較してみると、2幕までは「フェーブス」版に忠実で、老女ブリギッテはまだ登場していない。第3幕以降初版と相違するところを挙げてみると、初版にはシュトラール伯一族の滅亡の企みはなく、クニグンデが毒殺させようとした相手は、ケートヒェンである。又、ケートヒェンは国王の娘に格下げされているが、初版では皇帝の娘である。この変更に関しては、ウィーンの検閲にひっかかるからであろうと単純に考えられている。さらに、初版ではクニグンデの容貌の醜怪さをさらす入浴の場面が第4幕の後半を大きく占めているが、ここではそのような場面は見られない。ここからも、このモチーフは後からそう入され、初稿にはまだなかったのではないかという推測に一つの手がかりを与えてくれている。

しかしウィーンの台本は、クライストが送った脚本そのままであるとは思えない。クライスト自身、1808年12月8日にコリーン宛の手紙の中で、この作品は舞台用には短縮されねばならないことを認め、そのための改作をコリーンに委せると書いている。

ところで、クニグンデ像についてはそれとはまた異なるもう一つの憶測も生み出されている。それはビューローの伝えるティークの談話がもとになっている。ビューローはクライストの手紙やクライストと生前に接触のあった人々から取材して、1848年にクライストの伝記を出版した。その中でティークの談話として次のようなことを報告している。

「クライストはケートヒェンを書きあげ、ティークに示した。ティークは中でも、作品全体をいわばメルヘン的にもしくは魔術的世界に導入させている一つの独特な場面について、

意見を述べた。クライストはこの言葉を非難ととり、ティークの知らないうちにこの場面を削ってしまった。ティークは、後に印刷された本の中にはこの場面のないのに気がつき、繰り返し遺憾の意を表明した。というのはこの場面はクニグンデの戯画化された醜怪さをはるかに適切に動機づけ、よりわかりやすくしていた。

この場面によると、第4幕でケートヒェンが岩の上を歩いていると、下の水の中に水の精が現われ、歌い話しかけながら彼女を誘いこもうとする。ケートヒェンはとび込みそうになるが、同伴者によって辛うじて引きとめられ、助けられる。この前に彼女は、クニグンデの入浴中の醜怪な姿をぬすみ見てしまい、伯爵をいかにしてこの怪物から救い出そうかと、恐ろしさのあまり我を忘れていた。この場面の中からティークは、そのときふたたび石の下から湧き出てくる、という美しい一行をなお記憶していた。^(注4)

これによると、クニグンデは人間でなく、水の精と関連づけられている。しかし、この場面が実際に初稿にあったのかどうか疑わしいとこれを否定する論拠もいくつか挙げられている。ティーク自身はこのことを一言も述べていないこと、ティークとクライストとの間に親密な交際があったことは立証できないこと等。^(注5)

しかしこのような憶測が生まれるのも、クライスト自身の嘆き、すなわち最初の「すばらしい構想」を改めてしまった、という言葉と結びつけられたのであって、憶測の生まれる理由がないでもない。クライストが、どこをどのように改めたのか定かではないが、「フェーブス」版と初版との比較だけでも、クニグンデの描写のところでは顕著な変化がみられることがはっきりしている。故に、クニグンデ像の修正こそがすべての修正の中心であり、クニグンデは初稿では、われわれの知るクニグンデとは違った機能を果していた

のではないかと、という推測が根深く残っているのである。^(注6)

ところで、仮りにビューローの伝えるままに、クニグンデを水の精と同一視し、彼女の素姓を魔術的世界に求めるならば、どうであろうか。そうすると、ドラマのテーマは宗教的もしくは形而上的になるであろう、とレベリングは主張する。^(注7)二人の女の間の男のテーマ、一方の女は妖しく魅惑的で、男を破滅させるために魔界から送られた女、他方の女は男を破滅から救い出すように天国から送られた女、二つの世界が一人の男の魂を求めて戦う。このモチーフはティーク自身が興味があったもので、ティークはこのテーマで2つの物語を書いていることを指摘している。

クニグンデの奇怪な醜怪さを、目のくらむような美しさによって男を魅惑する水の精と彼女を結びつけることで、説明しようと試みているのであろうが、われわれの知る限りでは、この作品の中に水の精を思わせるような要素は認められない。

それよりも、クロイツァーはクニグンデ像の中には、物欲のモチーフと結婚詐欺のモチーフとが混入しており、後者のモチーフでクニグンデの異様な醜怪さの説明がつけられるとみている。そして2つのモチーフがお互いに関連なく作品の中に併存していることに注目し、このことは、作品制作過程で2つが別々に作品に入り込んだことを示している。物欲のモチーフが初版で幾分後退していることから、これの方が古く、結婚詐欺のモチーフの方があとで作品に入れられたのではないかと推論する。さらに、2つのモチーフはドラマの中で、それぞれ異なる人物に結びついていて、物欲のモチーフはライン伯を中心にしており、結婚詐欺のモチーフはフライブルク伯に中心点を見出しているが、シュトラール伯に至っては2つのモチーフが同時に現われている、と分析している。

ここで問題になっているクニグンデの奇怪

な醜怪さを現わす場面は、第4幕と第5幕にある。そこで、次に第3幕から順を追ってあらすじを紹介しておきたい。

(4)

第3幕 シュトラール伯から、跡を追うなどさとされ、それを約束したケートヒェンは、僧院に籠ろうと決心し、父と許婚につきそわれて修道院へ行く。ケートヒェンが、修道院長のところへ行くと、そこにちょうどライン伯からの手紙が届いたところで、それにはクニグンデの城に夜討ちをかけて、彼女を奪いとうろろという企みが記してあった。ケートヒェンはその手紙をひったくって、クニグンデの城に滞在しているシュトラール伯のもとへ駆けつける。そもそもその手紙というのは、あて名と中味をとり違えて封かんされ、間違って修道院長のところへ届いたものであった。シュトラール伯は、ケートヒェンが約束を破って、再び現われたことを怒り、最初は彼女に会おうともしなかった。伯爵の従僕のゴトシャルクが彼女を部屋に通すと、伯爵は鞭をとって彼女を追いはらおうとまでする。ここの場面は、手紙の内容よりも、ケートヒェンに対するシュトラール伯の複雑な感情をあらわす動作が印象的である。

クニグンデの城は、結局ライン伯の夜討ちにあい、城は炎上する。クニグンデは、いまにも焼け落ちようとしている城の中から救い出されるが、シュトラール伯から頂いた彼の肖像画の入っている大切な箱を残してきたので、ぜひとり出してもらいたいとわめきちらしている。ケートヒェンがすゝみ出る。シュトラールは驚いてひきとめるが、クニグンデはそれには構わず、平然と彼女を行かせる。クニグンデは、このときはじめてケートヒェンを知ったのであるが、伯爵のケートヒェンに対する配慮に気がつく。人々の見ている前で城は崩れ落ちるが、ケートヒェンは天使に救い出され、崩れずに残った大玄関から、手

に巻き紙をもって現われる。彼女の無事な姿をみて、伯爵は喜びをあらわにする。クニグンデは、ケートヒェンが巻き紙だけで、箱を持ってこなかったことを怒り罵る。実はその箱の中には、シュトラール伯から結納として贈られたシュタウフェン譲渡の証書が入っているのだが、誰もまだ知らない。

第4幕 ケートヒェンは、城の焼け跡からその箱をひろいあげ、シュトラール伯に渡そうとするが、近づけない。ゴトシャルクが代って受け取り、中味をみていまいまいしく思い、ケートヒェン自ら伯爵に手渡すように、と彼女に返す。次の第2場は初版で入れ替えられた第2幕第9場のブリギッテの話と呼応している。シュトラール城の樹木のおい茂る、崩れ落ちた外壁のあたり、ニワトコの茂みのところで、ケートヒェンはまどろんでいる。シュトラール伯は、例の箱をふところに入れながら、彼女に近づく。

彼はケートヒェンが何故これほどまでに自分を追うのか、真実を知りたい、と眠るケートヒェンに質問を試みる。ケートヒェンは答える。来年の復活祭に、あなたは私と結婚する、と女中のマリアーネが予言したことを。さらに、あなたは大晦日の晩に私に会いにいらっしやう、と言ってシュトラールを驚かさず。彼女の話は、夢かと思われた彼の体験とぴったり一致する。だが、ただ一つその少女は皇帝陛下の姫君という天使のお告げとは合わない。このことが彼を多いに悩ませる。

第4場から、再びクニグンデが登場する。クニグンデは城が焼け落ちたために、シュトラール伯のところに滞在している。第4場でクニグンデは伯の不在を不審に思い理由を問うと、ロザリーエは、昨夜おそく皇帝の使者達が訪れて、伯と密談していたが、今朝早くからもうどこかへ出かけた、と答える。ここでシュトラールはケートヒェンの出生の秘密を探っているのであり、この場面は第5幕第1場へとつながるのだが、この話は一時中断

されて、続く第5場から第8場までは、クニグンデの洞窟での入浴の場面となる。ケートヒェンはクニグンデの醜怪な姿をかいまみて恐れおののき、シュトラールの身を案じる。見られたことを知ったクニグンデは、ケートヒェンに毒薬を飲ませて口を封じるように、ロザリーエに命じる。

第5幕 第1場、ヴォルムスの皇帝の居城の前の広場、一方の側には玉座、舞台奥には神明裁判の法廷。シュトラール伯が、ケートヒェンは皇帝の娘という噂をひろめて妻に汚名を着せたと訴えるテオバルトの告訴をとりあげ、皇帝はテオバルトとシュトラール伯の両人を召喚し、決闘によって真実を証明するよう命じる。その結果は無残にもテオバルトの敗北となり、シュトラール伯の語るところが、真実であることが証明される。皇帝は蒼白になり席を立つ。第2場は、皇帝の独白で、皇帝は今から16年ほど前に、ハイブルボンで過ごしたある晩のことを想い出しつつ、ケートヒェンが自分の娘であることを認めていく。

第3場から第9場までは、再びクニグンデを中心とする場面に変る。第3場では、クニグンデがケートヒェンが自分の入浴中をのぞき見したというだけで、彼女の毒殺を謀ったことをシュトラール伯に報告しようとして、伯爵の家臣が伯を探しているところに、そこに以前の婚約者のフライブルク伯が現われて、クニグンデの正体をばらす。クニグンデは自然の三界から組み立てられている寄せ木細工みたいなもの、歯はミュンヘンの娘のもの、髪の毛はフランスから取り寄せたもの、ほっぺたの色はハンガリーの鉱山産、みんなが感嘆するスタイルは鍛冶屋がスウェーデンの鉄でつくったコルセットのおかげ、と言う。第4と第5場で、シュトラール伯は化粧中のクニグンデの素顔をかいまみて驚く。ロザリーエは必死で打ち消すが、第6場、伯爵の独白で、彼は今まで物事を測っていた自分の尺度が全

く狂っていた、と絶望する。

第7場、シュトラールは再びクニグンデとロザリエの前に現れ、クニグンデの方をしげしげと見やる。ロザリエはケートヒェン殺害の首尾をさり気なく聞き出そうとするが、伯はしらを切る。この場の会話で、シュトラール伯がケートヒェン毒殺の計画とその阻止をすでに聞いて知っていることを、われわれははじめて知らされる。

第9場、伯の様子から、クニグンデは自分の醜怪な姿を彼に見られたのではないかと察して興奮する。

第10と11場、クニグンデからの危害を避けるために、変装して洞窟の中にかくまわれているケートヒェンのところに、帝国顧問官、皇帝、テオバルト、少し遅れてシュトラール伯が訪れる。そこでケートヒェンを娘と認めると記す皇帝の親書が渡され、ケートヒェンは皇帝が父であることを知り、皇帝の腕にすがる。シュトラール伯はケートヒェンを妻として賜わりたいと願い出る。

第13、14場、結婚式の場でいよいよ大団円、皇帝をはじめ一同いならぶ中、クニグンデは花嫁の衣装をつけて出番を待っている。しかし名前を呼ばれたのはケートヒェンであり、ケートヒェンはフライブルク伯に伴われて登場する。万事めでたしめでたしと一同が浮かれる中、ただ一人侮辱をうけたクニグンデは、捨てぜりふを残して一族とともに退場する。

(5)

上でみてきたように、第4幕から第5幕にかけては、雑多な筋が綾をなして織り込まれてくるが、お互いの連関が密ではなく、かなりぞんざいに投げ出されたままであるという印象はぬぐい切れない。特に、クニグンデの醜怪さの場面がそう入されるところで、この印象を強めている。そこで、完全には納得のいかないところを拾いあげて、もう一度筋の流れを見てみたい。

先ず、第4幕冒頭の例の箱に関して、いくつかの疑問が浮ぶ。ゴトシャルクは、ケートヒェン自から伯爵に手渡すようにと返したのに、第2場で明らかなように、それはすでに伯爵の手に渡っているが、伯爵はゴトシャルクから手渡されたと言っている。このくい違いは、何らかの理由で例えば場面の短縮のためとかで、その間の事情を舞台の外で処理したために生じた、とみなして納得するにしても、箱に関してはこれっきりで、以後話題にもされないのは妙である。第3幕でクニグンデがこの箱のことで、あれほど大騒ぎをしたと言うのに、彼女の手にも渡されていない。もし伯爵がこの場で箱を明けたならば、クニグンデの本心、すなわち彼との結婚に執心するのはこの中にある証書が欲しいためということが、直ちに明らかになったであろう。そうなると、クニグンデの醜怪さのモチーフはつけ足しになるので、箱のモチーフは放置されてしまったのであろうか。

次に、第5幕第3場、クニグンデのケートヒェン毒殺計画を伯爵に報告しようと、家臣が彼を探している場面であるが、これを受けて、伯爵がこの報告を聞く場面はないのに第7場から、伯爵はすでに知っていることを、われわれは知らされる。これも場面の短縮として納得するにしても、毒殺計画のモチーフもかなり軽く扱われているという印象は否めない。それもこれも、ただひたすらクニグンデの醜怪さのモチーフに固執するがためで、それ故に、それ以外のモチーフはしりきるとんぼになるのではないだろうか。

第5幕第6場で、伯爵はクニグンデの醜怪さを見たことにより、大きな衝撃をうけて、自分の認識の不確かさを思い知り絶望する。このときにはまだクニグンデの毒殺計画を伯爵は知らなかったのかどうか、定かではないが、いずれにせよ場面で判断する限り、伯爵にとっての衝撃は彼女の外面的な醜怪さを見たことの方が、彼女の恐ろしい陰謀を知るこ

とよりも大きいという印象を与えている。かくして、クニグンデを身心とも醜怪な人物に設定することで、舞台効果は2倍になるはずのものが、あれもこれも、クニグンデは独自の個性を持った人物というよりも、ケートヒエンとの対比において、考えられる限りの醜怪な像を積み上げて作られた人物という印象は捨てきれない。

このように、このドラマでは次々と、色とりどりのモチーフが現われては立ち消えていき、一本の筋で構築される緊密な古典的ドラマ構造をとっていない。このことを、クロイツァーはドラマ形式からみて、次のような説明をしている。^{注9}

このような百花りょう乱な場面構成は、南ドイツのバロックの伝統につらなるものであり、クライストは「ケートヒエン」では実際の劇場の条件を考慮したため、処女作「シュロップフェンシュタイン家の人々」以来目標にしていた古典的ドラマ形式を捨てて、騎士劇という伝統形式を選んだ。これをクライストの発展段階からみるなら、古典から離れて国民的文学の継承者への一步を歩んだことを意味しており、この歩みには、国民的素材へ向かう次の歩みがすでに準備されている。

さて、クライストの初稿は、われわれが今みるものと違っていたのではないかという仮定に、ゼムトナーも一つの資料を提供している。^{注10}

それは Dr. Wolfgang Grözinger が、第2次大戦前にミュンヘンの Auer Dult の古本屋で見つけ出した「ケートヒエン」の古い Soufflierbuch（舞台監督用の台本の一つ）に基づいている。それにはデトモルトのリッペの王立劇場のスタンプが押してあることから、ゼムトナーはデトモルトの王立劇場での「ケートヒエン」の上演史を調べ、現在なおそこに残っている「ケートヒエン」の2種類の役者用の台本ともつき合わせ、さらにこの台本を「フェーブス」版と初版とティーク版

との3つの版の本文と比較分析して、次のような結論を出している。このデトモルトの台本は、今までに未知のクライストの原稿を基にしており、この原稿は1842年デトモルトに入り、この地で同年3月14日に上演された。この原稿は、おそらくシュトラール伯の役を演じたリンデン氏によって持ち込まれたものであろう。さらに、この台本は、本文と句読法から比較判断すると、多くの点で1808年の「フェーブス」版と1826年のティークの編集による版と一致するが、1810年の初版とは相違する。しかしティークの版に近いといっても、直接的な関係は認められない。これらのことから判断すると、その当時ライマー書店はなおクライストの原稿を所持していて、この台本はこの原稿から直接に書き写されたのではないか、ということが推測されうる。ところで初版がこの原稿と相違するという矛盾は、ライマー書店が初版刊行に際して、原稿のコピーをクライストに送り、このコピーにクライストは本文と句読法の修正をして送り返したのち、印刷はこのコピーに基づいてなされたために生じたということで説明がつけられよう。なお、ティークは「ケートヒエン」にも手を入れていると一般にはうけとられているが、「ケートヒエン」に限っては、この原稿（コピーではない）にかなり忠実に編集したのであろうとゼムトナーは提起する。

さらに、ゼムトナーはこのデトモルトの台本のうち、純粋にクライストの原稿の部分とホルバインの脚本の部分とデトモルトでの演出の際にそう入された部分とをより分け、この台本には、クライストの手によらないものも確かに混入されているが、それでも、本来の原稿の構造は認識できるとみなし、初版との相違を明らかにしている。筋の展開での大きな相違は、デトモルトの台本には、第5幕第2場の皇帝の独白の場面と第4幕の後半のクニグンデの入浴の場面とがないということである。ゼムトナーは、これらの場面は演

出によって削られたのではなく、クライストの原稿にもとまなかったとみなす。5幕2場に関しては、「ホンブルク」の選帝侯の場合と同様に、このような高位の人物に心の内をさらけ出させるような独白がない方が、かえってクライストらしいと考える。

4幕後半のクニグンデの醜怪な場面の欠如は、当然他のところにも影響を与えている。デトモルトの台本では第4幕の、冒頭に出てくる例の箱のモチーフがきちんととりあげられ、場面をひっぱっている。城が焼け落ちたために、クニグンデはシュトラール伯のところにいるが、そこへケートヒェンが箱を届けにくる。ゴトシャルクが受け取り、箱の中味を見てからロザリーエに渡して、クニグンデの反応をうかがう、とあるが、ここはホルバインの脚本の部分とみなされるようだ。次のケートヒェンの毒殺を命じる場面は、初版とほぼ同じでクライストの原稿の部分であるが、ケートヒェン毒殺の経緯は、ここでは当然クニグンデの醜怪な場面と結びつけられえない。といって、例の箱とも直接結びつけられず、例えばケートヒェンからシュトラール伯に箱の中味が告げられることを恐れたため、ということでもなく、城が炎上したときのクニグンデの観察で、シュトラール伯がケートヒェンを愛していることを彼女は察した、だから競争相手としてのケートヒェンの抹殺を凶ったため、とゼムトナーは解釈する。彼の見方では、初版においてもすでに、クニグンデが何よりも恐れているのは、醜怪な姿があばかれることではなく、ケートヒェンがライバルとなることであった。

さらに、デトモルトの台本では、ケートヒェン毒殺の計画とその阻止を、シュトラール伯がゴトシャルクから直接に聞く場面があってこのモチーフはかなりの重みをもって扱われていることがわかる。シュトラール伯が自分の認識不足に絶望するのは、直接これと結びつけられており、彼がクニグンデをじろじ

ろ見まわすのは、彼女の恐ろしい本性を見定めようとしてである。

以上、デトモルトの台本のうち、特にクニグンデのところまで変っている部分を取り上げたが、その結果、ここにはクニグンデの醜怪さを表わす場面、つまり初版の4幕4場から7場までと5幕3場から5場までに当る場面がないことがわかった。これらの場面は、クライストのもともとの原稿に実際になかったのか、それとも演出家の意図により削除されたのか、はっきりと結論できかねるところがあるがともかく、これらの場面があとから作品に入り込んだという仮説を受け入れるなら、初版のかなりルーズな場面の連関がかなり都合よく説明されうることは確かであろう。

いずれにせよ、クニグンデの登場する場面で特に、このような種々の仮説が生まれるということは、クライストの改作の際の中心的課題がクニグンデ像にあったのではないか、という仮説がかなりの真憑性を持ってくることであろう。

注1) Kaiser, Tino : Vergleich der verschiedenen Fassungen von Kleists Dramen, Bern und Leipzig 1944, S. 317

注2) Röbbling, Friedrich : Kleists Käthchen von Heilbronn, Dr. Martin Sändig oHG 1913, S. 51

注3) Sembdner, Helmut (Hg.) : Heinrich von Kleists Lebensspuren, Carl Schünemann Verlag Bremen 1957, Nr. 352

注4) Lebensspuren, Nr. 272

注5) Kreutzer, Hans Joachim : Die dichterische Entwicklung Heinrichs von Kleist, Erich Schmidt Verlag 1968, S. 169f.

注6) Kaiser : aaO., S. 329

注7) Röbbling : aaO., S. 110

注8) Kreutzer : aaO., S. 172

注9) aaO., S. 228

注10) Sembdner, Helmut : "Das Detmolder Käthchen von Heilbronn," Carl Winter 1981